





TORANOMON HILLS

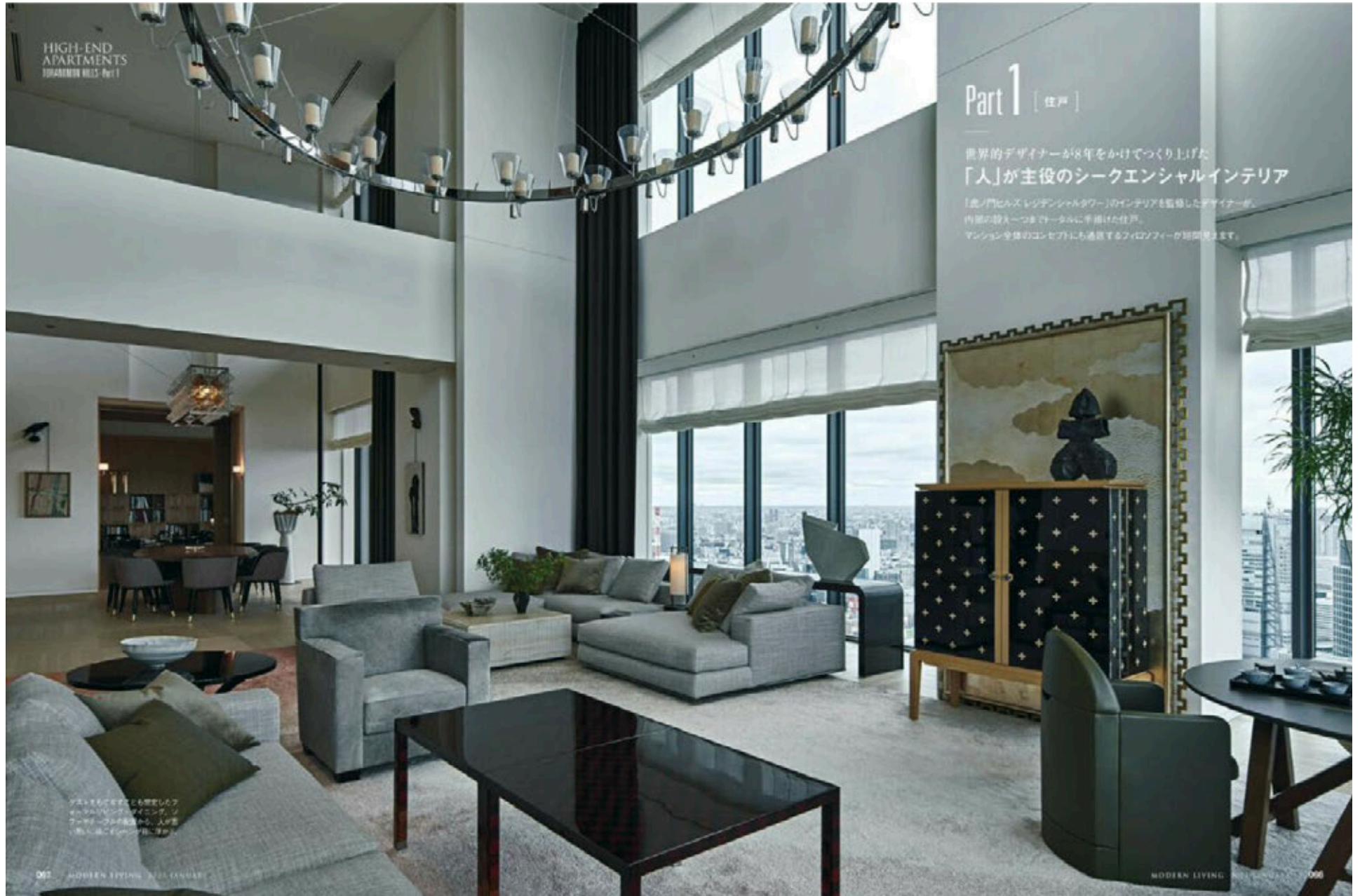
次なるステージへの幕開けを告げる
マンションライフの
最高基準がここに

NEXT STAGE OF
HIGH-END
APARTMENTS

2022年1月、森ビルが開発を手掛けた虎ノ門エリアに、高級住居棟の「虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー」が完成。空間、サービス、そして価値観を基盤に、そのものの高い創造性は、これからの日本のマンションの在り方に新しい働き基準と変革の起点を探し出しています。

TEL: 03-5575-0733 (03-5575-0811
(受付時間 10時45分～16時45分)
販売担当: 森ビル (03-5564-5082～083)
営業担当: 森ビル





Part 1 [住戸]

世界的デザイナーが8年をかけてつくり上げた
「人」が主役のシーケンシャルインテリア

「虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー」のインテリアを監修したデザイナーが、
内部の設計一つまでオーダーで手掛けた住戸。
マンション全体のコンセプトにも通じるフィロソフィーが垣間見えます。

HIGH-END
APARTMENTS
TOMONOURI HILLS-TOWER

ゲストもここでも宿泊したフ
ィルム「ハンク・カーティング」、ソ
ニー・コーガーの写真から、入居者
の個性にこだわった内装

公私を緩やかにつなぐ「トランسفォーマー」の一室

tonychistudios



ダイニングから続くライブラリーは
壁面収納こそあり難い、ハイグレード
なスタイルで、大きな窓の眺望を活用
し、木の内張で高台を切り離せます。



A wide-angle photograph of a modern, high-end apartment interior. The foreground shows a long, oval-shaped wooden dining table with several chairs tucked under it. Above the table hangs a large, rectangular chandelier with numerous warm-toned light bulbs. In the background, a large living room is visible, featuring a sofa, armchairs, and a large window that looks out onto a cityscape. The room is well-lit by natural light from the windows and has a minimalist, contemporary design.

#070 今後世界はメリカットプランで、特に北米のフォーマルなリビング、ダイニングの内装が、ヨーロッパ風ルーム、フレンチリビングなども盛ん。客室はフォーマルなリビング、ダイニングの全室で、それぞれの部屋に壁から壁シルクテープはヨーロッパデザインの特徴だ。洗面所が壁と床を洗うしませんといい。階段部分を「セカンドドアーリング」の形で作る事だ。**#071** 全室壁紙で特に脚部、フロアマットラグ、特に、施設の床面は、床に直接接するアートで、床下や天井も直接見るシーンになってしまって。

間で「アーティスト」とは別にどうかに拘る
えられてしまふもそれなり。しかし、
人の感覚や感情をリテラルに想定す
してつくるもまた藝術と定めずには
ては、成らざリヌケは異能ない、
他と一緒に肉子のタグジニアリー
が稱している。

外側からではなく内側から
住む人の感情に寄り添う



メゾンキントの住戸の上階に設けられたギャラリー。サブベッドルームからゲストルームへの廊下があり、日常の生活空間でアートを楽しめます。

アスムーム。ベッドボードから床までオフホワイトのリップルフレット。壁は漆喰仕上げで、床は無垢の木の床。廊下は白で統一されています。

写眞の部屋はシアター。壁に豪華な壁紙と豪華な床。正面には壁面収納があり、壁面収納を活用したアートを楽しめます。

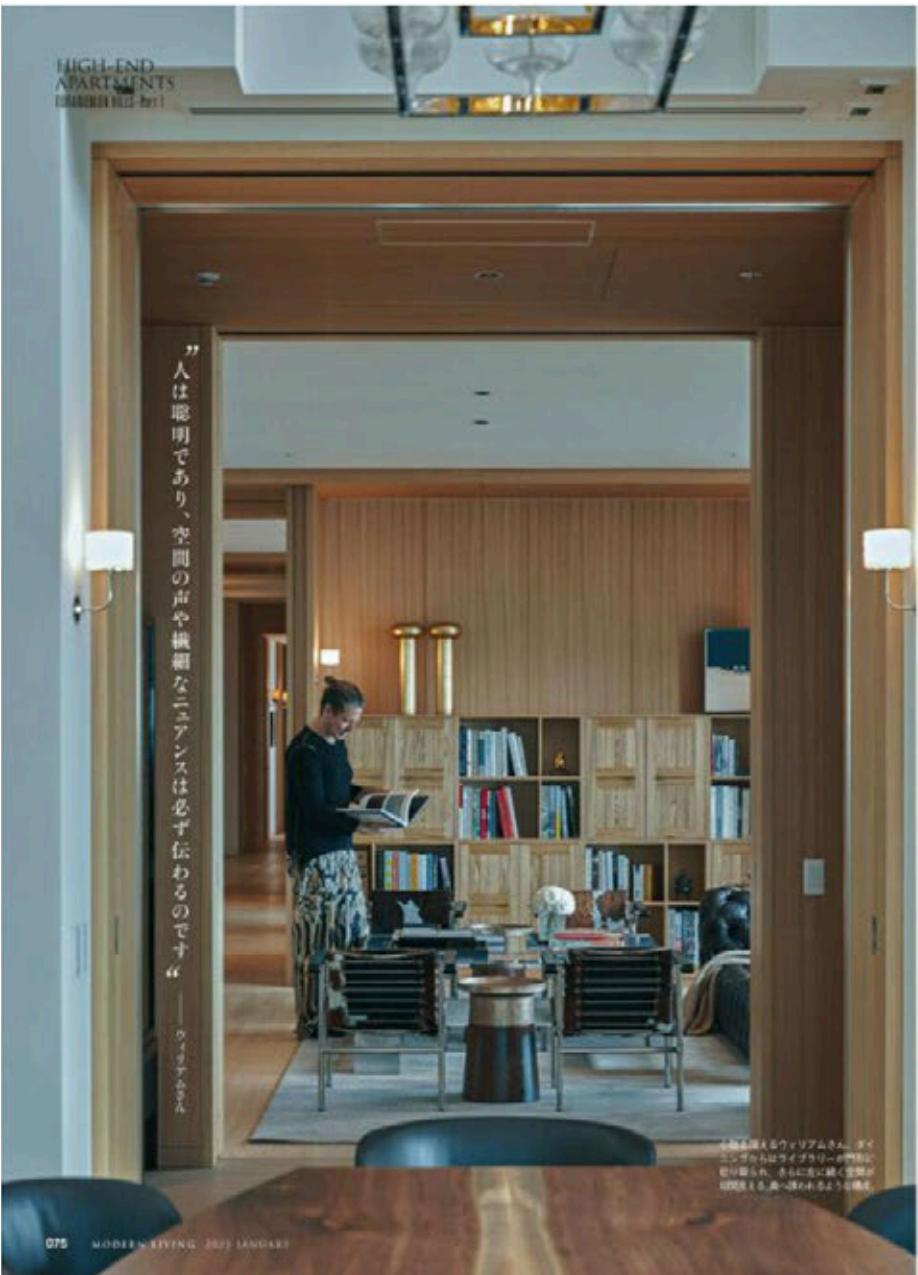
ファミリー層の玄関は間口を広めにシルエット的に見える。内装をドライwallで施したもので、光の反射が空間の感じを出します。



人は聰明であり、空間の声や繊細なニュアンスは必ず伝わるのです。

—— ウィリアム・ペイリー

本書を翻訳するウィリアムさん。ダイニングからはライブラリーが門檻に近づくなら、さらに方に近く空間が開拓され、奥へと流れれるよう構成。



他の立場でウィリアムさんが語っているシーン。シャンデリアが床、スクリーン、アート、キャビネット、テーブルでんだんと人間に近いストーリーが織り成されることがよくわかる。

「感情に作用するショーマンデザインのためにには、シーケンスという考え方方がとても重要です。マンションの場合それぞれの住人がたどり着くまでの道のりも含めて。それを感心する人が常に心地よいと感じられるようになる必要があります。エクステリアから共用部、共用部から住戸へ、そして各部屋へ、そのすべてが美しい一連の流れになっていてなければならないのです。室内についても同様です。部屋をつくるということは、空間と空間、空間と人の関係性をつくるということ。部屋から部屋を移動するとき、あるいは今いる部屋から他の部屋を見たり、視界に映るものに興奮やパラランス、配置や直線を感じ取れることは、インテリアデザインにおいて最も大切なことの一つといえるでしょう」

「ウィリアムさんの注目どおり、この部屋のなかを進んでいくと次々に美しいシーンが展開し、まるでクルーズしているような感覚を覚える。スムーズなつながりのなかで空間性は多形に変化し、もてなしのパリッタな場からプライベートなスペースへと、空間のセピカルキーも巧みにブランディングされていることがわかる」

「例えば、もてなしのステージにもなるフォーマルリビング・ダイニングは最も開放的な場所に設けていますが、ダイニングの奥に続くライブラリーは門檻のフレームほどよくハートしています。そして、さらにその先には、あとで過路の袖を左に下すようにしてアパートな居室がつながっていく、そのように空間を移動すべきか、視線や意識を導るようデザインしているのです」

「住居の個性や大きな空間のなかで、セーランスタイルを遺脱せずに、住宅としての落ち着きを生み出す方法

についてはどう考えていたのか尋ねた。

「空間を細分化していくのです。人が心地よいと感じられるように、インテリアデザイナーをつくってスケールダウンを図ります。リビングを例に取れば、私の獨創デザイナーが見えてくるはずです。シャンデリアは空間にはどい番をするイメージ。次にカーテンのドレープがあり、アート、キャビネット、ナーブル…と水平にも垂直にも、ラインが組み重なっているでしょうか？ スケール感と構成要素については、大きな視点と細分化した視点を何度も行き来し、プランを詰めていくのです」

空間のつながりだけではなく、一つ一つのコーナーにおいても、自然で心地よい目流れ。シーケンスが織込まれている。ウィリアムさんの話を聞き、空間を目当たりにすると、インテリアをつくるということとはして表層的な装飾をいうのではなく、人の感覚を深く届けつくるのであるという、デザインの核心に触れる感覚がある。

Profile William Paley ウィリアム・ペイリー

インテリアデザイナー、トニー・ラー スタジオにおいて最初クリエイティブディレクターを務めた後、現在は独立。高い造り日本文化への理解と造詣も高い。



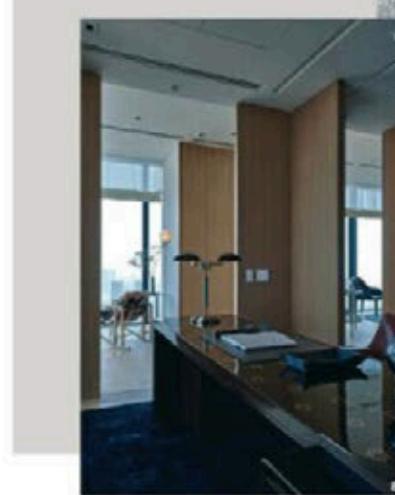
Interview

デザイナー
ウィリアム・ペイリーさん
インタビュー

人の動き、目線、感情に働きかける。それこそがデザイン



過剰も不足も一切ない
美しさとリアリティの共存



● お隣室内ベッドサイド。キャビネットも照明をオリヅル。● フォーマルダイニングカウチフクリーをつくり空間。壁や引き戸で仕切ることで全く、奥行き2mほどのスペースを設けることで距離を後りに変えるオーバル。アーピングのオリジナルのドア。フラワーショップ販賣部など、細胞までこだわりが見える。● 豊富なデスクにある花のような文様は窓の隙所で繋り渡されている。これは「自分の家にいる」と安心させるデザインの仕掛け。



tonychistudios



● ゲストルームのベッド横には大きなアートがまっすぐに掛けられている。スクエアードのヘッドボードとのオサードドアの組み合わせが斬新。オゼスト風の間接。廊上のオブジェが視線を通し、● この部屋は共用部でも設備する。住戸と共用部の一体感を演出。● 階下から見えるオーブルセイドランジの一角。階段が伸びる先には、必ずポイントがある。



じいを切り取つても
美しいシーンが展開する





エントランスに入ると正面に色彩豊かなアートが迎える。ペルカーム・フリスの作品。アートの多くはコミッションワークとして制作されたもの。



エントランスからエレベーターホールへと向かう廊下。大規模な吹抜け空間、大きな光の通路、小窓の運びなどが格式高い雰囲気を醸し出す。

Part 2 [共用部&サービス]

共用部の在り方が
暮らしの質に直結する
「家」の延長にある
インテリアとサービス

「此ノ門ビルズレジデンシャルタワー」における
「家」の境界は、住戸の玄関扉ではありません。
毎日通るエントランスや廊下、ラウンジ、
用意されたその他のサービスなど、
そのすべてが暮らしの一部なのです。



住戸だけでなく
暮らしの場が
拡張していく



■上層階の居住者専用の「スカイズイート」。他に、すべての居住者が使用できる約100㎡の「TVビンタ・ダイニング」。10、11階は、ホーリーブラッヨアートから子供の心のままでもらう。アートはフランシス・カジキの作品。11 ヨージー・ワジラゴー。正面のガラス窓の外は、公園と住戸が一通の「窓」である表層。



Patricia Urquiola

パトリシア・ウルキオラ

スペイン出身の女性デザイナー。2016年からカッショクのアートディレクターを務める。カルモラガ監修したマルソナロブトの新事業、リビングに貢献する町アーティギャラリーを開いていることがこの後の目標だ。オフショウのように美しいカッショクの豪華なアートを愛するにふさわしい存在感を放つ、使えないものも活用するセンスが魅力。

© Patricia Urquiola S.p.A.



上層階の大型住室の戸内のみ、スクルトン状態で購入することができる。

Part 3

[オーダーメイド用住戸]

間取りやインテリアを
自由にクリエイトできる

世界最高峰の デザイナーとの家づくり

上層階に数戸のみ、内装や仕上げを施さないままの、いわゆる「スケルトン状態」の住戸が存在します。

購入者は自分の好きなデザイナーや、森ビルが紹介してくれるデザイナーを選ぶことも可能。

マンションインテリアの選択肢が格段に広がります。

© New Material Research Laboratory



SCDA

エスシーディーエー

建築家スー・K・チャンが率いるSCDAはシンガポールに創設したデザインスタジオ。モデルプランは、SCDAとイタリアのトリップ製陶ブランド、ボリフォームのコラボレーションによって設計されたもの。LCDを中心とした建築技術と、ボリフォームのカラーフォームウォールシステムを効果的に採用することで、ミニマリストと個性派とが共存した空間が実現されています。

New Material Research Laboratory

新素材研究室

現代美術作家の村山桂樹と建築家の伊藤隆也が2009年に立ち上げた建築設計事務所。石材、漆喰、半透明石や砂岩など、自然素材をふんだんに取り入れたプランが特徴的。時間の経過と共に味わいが増すマテリアルによってタイムレスな住まいを構築。居室や浴室、収納のスペースなど、日本文化を尊重し、古市のデータと共にある暮らしを提案している。



Nicola Gallizia

ニコラ・ガリツィア

2003年にミルトニのアートディレクターに就任。イントリアから建築プロジェクト、プロダクトデザインなどの分野で活躍する。ニコラの提案は、心に残りながら、自然の植物や色合いのエッセンスを室内に取り込んだもの。インテリアカラーは、カントリーサイドの豊かな自然を想起させるグリーンや赤褐色。サンドベージュなどを差し色に配している。

© Nicola & Partners



Lissoni & Partners

リッソニ&パートナーズ

イタリアのボッティやリビングファニチャーなど、豊多くのブランドのリユエティップディレクターを務めるエローリッソーニのデザイン事務所。建築で目を引くのは、フォーマルリビングの窓から天井まで壁一面を連続的にすること、空間のダイナミックさをより強調したデザイン。ファミリーデザインングには豪華なエッセンスを組み込んだ点も。



© LISSONI Architects

日本では珍しい
スケルトン的な提案

日本では珍しいスケルトン的な提案

日本では珍しい
スケルトン的な提案

マンションの暮らしは
街の豊かさや可能性と共にある

